

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成29年8月23日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 教育学研究科

職 名・学 年 博士課程2年

氏 名 石 井 佳 葉

助成の種類	平成29年度 ・ 国際研究集会発表助成	
研究集会名	国際ロールシャッハ及び投影法学会第22回大会 International Congress Society of Rorschach and Projective Methods XX II nd	
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input type="checkbox"/> 口頭 ・ <input checked="" type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()	
発表題目	日本の青年における父親・母親イメージ図版の検討 Reactions to Rorschach “Father” and “Mother” cards among Japanese adolescents	
開催場所	フランス・パリ	
渡航期間	平成 29 年 7 月 16 日 ～ 平成 29 年 7 月 28 日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付し て下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会計報告	交付を受けた助成金額	300,000円
	使用した助成金額	300,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	航空賃:181,390円
		宿泊料:110,100円
		学会参加費:22,460円
計:313,950円		
上記に助成金を充当		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 京都大学教育研究振興財団の研究助成を賜り、心より感謝申し上げます。遠方のヨーロッパでの学会参加を決意できましたのも、貴財団の寛大な支援のおかげです。多国籍の研究者との交流を持つことができ、大変貴重な経験をさせていただきました。誠にありがとうございました。	

1. 研究集会の概要と印象

国際ロールシャッハ及び投映法学会は、各国のロールシャッハ法をはじめとした投映法を用いた研究、アセスメント事例を素材に自由に交流する機会として 22 回目を迎えた。今大会は、シャンゼリゼ通りにほど近いパリ第 5 大学で開催された。パリのおしゃれで自由な雰囲気は会場内にも漂い、気さくなスタッフが常にあたたかくサポートしてくれた。私の研究テーマの一つであるロールシャッハ法は、スイスの心理学者ヘルマン・ロールシャッハによって生み出されて以来、各国でその解釈方法が研究され、実践が積み重ねられてきた。近年はエビデンス重視の流れを汲んだ手法が多くみられるが、今大会では精神分析、自我心理学などの力動的視点からの被検者理解も発表されており、ロールシャッハ法の奥深さを再確認することができた。さらに、ロールシャッハ法に限らず、TAT などの古典的なものから ORT などの手法まで、投映法を用いた研究や臨床事例も多く発表された。報告者はメインの会場で行われたシンポジウムや講演に参加することが多かったが、そこでは各国の興味深い臨床事例が報告された。文化的な背景は異なるものの、アセスメントにおける基本姿勢や、クライアントの抱える病理の理解は本邦と大きく変わらない印象を受けた。

2. 報告者の発表内容

発表①（ポスター発表）

報告者は「socio-cultural approaches」の枠で発表を行った。日本人青年を対象として、ロールシャッハ法の父親・母親イメージ図版選択に着目し、選択されたカードにおける感情カテゴリーの分析を行った。10 枚のロールシャッハ図版のうち、IV 図版が父親イメージ、VII 図版が母親イメージとして選択されやすいこと、そしてこれらの図版がそれぞれ両親のイメージを象徴しているという「父親・母親イメージ図版解釈仮説」が知られている。33 名の大学生に個別にロールシャッハ法を施行し、父親・母親イメージの図版選択を求めた。この仮説に合致して選択した対象者は、父親イメージ図版が 33 名中 9 名、母親イメージ図版が 2 名という結果であり、仮説は支持されなかった。そこで、名古屋大学式技法の感情カテゴリーを用いて、仮説上の父親・母親イメージ図版と、それ以外に選択された父親・母親イメージ図版の反応に着目し、その感情価に関して統計的に比較した。仮説上の父親イメージ図版（IV 図版）では「不安感情」が、実際に選択された父親イメージ図版（IV 図版以外）においては「快感情」がそれぞれ有意に高いことが示された。仮説として IV 図版がそのインクの特徴から厳格さや男性性をあらわすと考えられてきたが、日本の青年にとっては不安が喚起され、父親イメージとしては快感情の付与された図版が選択されやすいことがうかがわれた。また、母親イメージについて統計的な結果は得られなかったが、傾向として、選択された図版には肯定的な感情が付与されやすく、否定的な感情表出には抵抗がある可能性が推察された。

発表②（口頭発表）

対象関係技法（Object Relations Technique ; ORT）は内的対象関係の理解を目指す新しい投映法であり、すでに国際学会での事例検討が進められてきている。本邦においてはこの手法

における分析・解釈の標準化がなされていない。そのため、**ORT**の日本版の開発を目的として、日本の青年を対象にデータ収集を実施した。投映法の臨床的適用とテストバッテリーの構築が可能であり、児童から成人まで幅広く活用可能な心理検査の適用を目指すものでもある。本発表では、数事例をとりあげ、その可能性について示した。

なお、本研究は科学研究費補助金基盤（C）による研究であり、申請者は、高橋昇（研究代表者／人間環境大学人間環境学部教授）・松瀬喜治（佛教大学教育学部臨床心理学科教授）・黒田浩司（山梨英和大学人間文化学部人間文化学科教授）・高橋靖恵（京都大学大学院教育学研究科准教授）の研究協力者として発表に参加した。

3. 本大会参加による成果

発表①では、コーヒブレイクやディナー前に参加者とポスターについて議論する機会に恵まれた。本国においても未だ普及しているとは言えない「感情カテゴリー」を用いた分析に、邦人も含めて多くの参加者が興味を示してくれた。もともと De Vos が提唱した解釈の技法ではあるが、国際的な認知度はそれほど高くはないため、各カテゴリーのニュアンスについて質問を受けることがあった。主流となっている片口法や包括システムでは零れ落ちてしまうような細かな反応を拾うことができる強味を感じる一方で、異なる文化背景をもつ研究者との間でコンセンサスを得ることの難しさも痛感した。今後は、自明のごとく用いていた感情カテゴリーについて批判的に検討しつつ、私の研究テーマの1つでもある青年期の両親イメージについて深めていきたいと考えている。

発表②については、質疑応答の際に本質的な質問を受けた。本発表で取り上げた **ORT** という技法は、従来より広く用いられている **TAT** をベースとしている。より具体的な対人関係場面である **TAT** に比べ、その場面設定を曖昧にすることでより無意識的な対象関係を捉えることができると考えられている。この **ORT** の可能性について発表を行ったが、参加者より臨床場面において用いることのメリットについて問われた。分析方法自体が発展途上であり、検査者および被検者（テストィー）双方のメリットを考えていく必要があると再認識させられた。

4. 謝辞

寛大な助成事業により、フランスでの国際研究集会に参加し、同分野の研究者の方々とのつながりを持つことができました。このような機会を与えてくださった貴財団に心より御礼申し上げます。